

スポーツの力

～する・みる・ささえる～

伊賀市スポーツ推進計画を策定しました

皆さんは、普段どのくらいスポーツをしていますか。スポーツは、サッカーや野球などの団体で行うもの、ジョギングやウォーキングなどの個人で行うものなど、多くの種目があります。

昨年(2021年)の国の調査では、20歳以上の人がスポーツを1週間に1回以上する割合は56.4%で、市内の同調査では53.6%と国のデータを下回る結果となりました。

スポーツ基本法では、スポーツは生涯にわたり心身ともに健康で文化的な生活を営む上で不可欠なもの、また青少年の体力の向上や人格の形成に大きな影響を及ぼすもの、さらには人と人との交流などを促進し、地域社会の再生に寄与するものと示してお

り、生活の多岐にわたりスポーツの果たす役割は非常に重要とされています。

市のスポーツを取り巻く現状は、少子高齢化が進む中、スポーツ施設などの利用者が減少傾向にあり、また子どものスポーツ離れや体力の低下がみられます。

こうした中、市では今後のスポーツ推進の指針として「すべての市民が生活の中でスポーツに親しみ健康で豊かに暮らせるまち 伊賀市」を基本理念としたスポーツ推進計画を策定し、「する(スポーツ人口の拡大)」「みる(スポーツ活動の普及啓発)」「ささえる(スポーツ環境の体制整備・施設最適化)」の3つの基本目標とそれに基づく7つの施策を定め、皆さんの健康増進に加え、精神的充実、人と人との交流による市民活力の創出などをめざしています。

皆さんも、爽やかな汗を流してみませんか。

スポーツ推進計画の詳細は、市ホームページをご覧ください。

【問い合わせ】 スポーツ振興課

☎ 22-9635 FAX 22-9694

✉ sports@city.iga.lg.jp



伊賀の歴史余話

藤堂高虎の変わり兜

24

大坂夏の陣の悲話

戦国時代の武将にとって、戦場の手柄は何より大事なものでした。敵味方入り乱れる戦場で、手柄を誇示するために武将たちが編み出したものに「変わり兜」があります。兜の鉢を装飾性の強い形状に加工することで、戦場での自身の存在を際立たせようとしたのです。

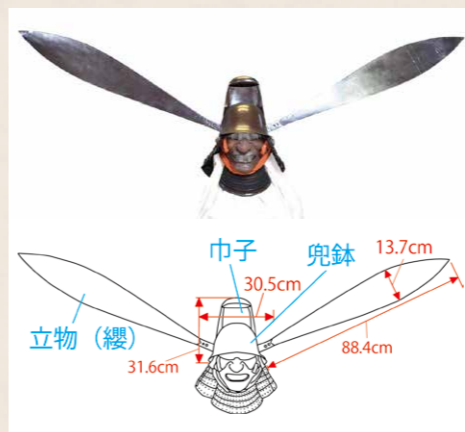
伊賀国を統治した藤堂高虎の兜も変わり兜の傑作とされ、古代中国の高官の冠を模した「唐冠形兜」と呼ばれるものです。冠の巾子(髻を納める部分)を模したものが兜鉢の頂上背部にあり、纓(冠の後ろに付ける装飾具)が兜の立物として表現されています。高虎の兜は、この纓が左右に奇抜なまでに突き出した点に特徴があります。

大坂夏の陣直前、高虎はこの兜を家臣の藤堂玄蕃良重に与えます。玄蕃家は、家祖の良政が高虎の従兄弟にあたり、良政が関ヶ原で戦死後は、病死した長男に代わり、若き良重が家督を担っていました。「元和先鋒録」によると、高虎は兜を与える際、「自身が何度もこの兜で戦場に立ち、一度も遅れをとらなかつた。兜を譲るべきは良重以外にない。」と言ったそうです。良重

は夏の陣でこの兜を着用し、立物が朝日にきらめく様子は、並大抵の武者ではないように見えたと言えられています。

しかし、この戦いで藤堂軍は苦戦を強いられ、良重も瀕死の状態に陣小屋に運び込まれます。その際に良重は手を上げて苦しそうに「はね(羽根)が。はねが」と言っており、立物が小屋の入口につかえるのを気遣ったそうです。最期まで拝領した兜を気遣った後、言葉が続かなかったそうです。

良重が死の間際まで大切にしていた兜は、玄蕃家に代々受け継がれ、昭和54(1979)年に上野市へ寄贈されました。現在は、伊賀上野城で一般公開されています。



文化財課歴史資料係
☎/FAX 41・2271

明日に向かって ~差別をなくしていくために~

人権について考えるコラムです。

縮小する地域と人権課題 - 島ヶ原支所 -

都市部から離れた農山村や漁村などでは、若年者比率の減少と高齢者比率の増加が著しく、空き家や耕作放棄地の増加など地域課題が山積みです。

また、国では将来人口の減少を見込み、行政コスト削減のため、上下水道や道路などの更新見直しや、地域活性化の取り組みが進められています。

こうした社会情勢のなか、令和3年4月に「過疎地域の持続的発展の支援に関する特別措置法」が制定されたことで、市内では島ヶ原地域が一部過疎地域に指定されました。

島ヶ原地域では、地域社会の担い手不足や超高齢化、コミュニティの縮小に伴う地域活動の低下が進み、核家族や単身世帯が増加することが想定されています。

これまでの地域のあり方は、社会制度や経済的な要素で決定され、社会保障制度や地域振興策など健

康で文化的な生活を送るうえで必要な社会整備が進められてきました。

人間関係の基本は家族であり、地域コミュニティはその集合体です。しかし、縮小する地域が抱える「人口減少問題」は、そこに暮らす一人ひとりの営みに少なからず影響を与えています。例えば、地域慣例行事の衰退、耕作放棄地、空き家の増加による生活環境の悪化、それに伴う獣害など、あらゆる側面からの多種多様で新たな地域問題が浮き彫りとなり、地域住民一人ひとりの人権問題に繋がります。

地域と、そこに住む人々の営みを守るためにも、人口減少社会に見合った地域の運営と、地域課題に沿った社会制度と地域振興策が必要です。それが地域の営みを豊かにし、人権が尊重され、暮らしが守られる地域社会に繋がっていくと考えています。

江戸時代に伊賀国を統治していた藤堂藩の藩士山岡家の子孫、山岡祥之さんより同家に伝わる甲冑を本市に寄贈いただきました。

山岡家は、初代の山岡兵部重成が藤堂高虎に仕え、大坂夏の陣では、高虎の命令を伝える赤母衣衆として活躍、21歳の若さで戦死しています。

重成に跡継ぎがなかったため断絶した山岡家でしたが、大坂夏の陣から約250年後の元治元年(1864)、当時の藩主藤堂高虎の計らいによって再興し、幕末を藤堂藩士として迎えています。

寄贈された甲冑は「当世具足」と呼ばれる戦国時代以降に普及した種類のもので、兜や胴、籠手など一式が良好な状態で残され、兜には山岡家の家紋「抱き若荷」を模した立物が見られます。

6月26日に市役所を訪問された山岡さん



【問い合わせ】
文化財課歴史資料係
☎/FAX 41・2271

藤堂藩士ゆかりの甲冑を寄贈いただきました

んは、「古文書なども残されていたが、太平洋戦争の折に甲冑だけを何とか避難させたと言われている。大切に保管して欲しい」と寄贈への思いを語られました。

寄贈いただいた甲冑は、8月2日から12日まで市役所1階の市民スペースで展示します。精巧に作り込まれた武士の象徴といえる甲冑を間近にご覧ください。

■ご意見などは人権政策課 ☎ 22-9683 FAX 22-9641 ✉ jinken-danjo@city.iga.lg.jp